

# 高等学校における教科横断型授業改善について

## —学年主任としての取り組みとその考察—

教職実践専攻・ミドルリーダー養成コース

学籍番号 18GP404 氏名 下山 達彦

### 1 研究の目的

社会の変化は加速度的に進んでおり、サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する人間中心の社会(Society 5.0)が到来すると叫ばれている。教育は平和で民主的な国家および社会の形成者を育成するもの(教育基本法)であるならば、学校には、その時々の変化を捉え、その変化に対応した学びを子どもたちへ提供する使命がある。しかしながら、今日の学校においては、学びの中心である授業内容が社会の加速度的な変化に対応できない現状にある。本校においても、その現状は同様である。中央教育審議会 初等中等教育分科会（第100回）配付資料「資料1 教育課程企画特別部会 論点整理」では、「これからの時代に求められる資質・能力を育むためには、各教科等の学習とともに、教科横断的な視点で学習を成り立たせていくことが課題となる。そのため、各教科等における学習の充実のもとより、教科等間のつながりを捉えた学習を進める観点から、教科等間の内容事項について、相互の関連付けや横断を図る手立てや体制を整える必要がある。（下線は筆者による）」(文部科学省,2015)とされている。そこで、本研究では高等学校における教科横断型授業改善について、学年内の調整役である学年主任として取り組み、その過程において発生する課題や、発生した課題を解決しようとする中で見えてくる事実を考察することとした。このような考察をすることで、高等学校において授業改善が進まない原因の一端を探り、社会の変化に対応した活発な授業改善を実現するための一助としたいと考えた。

### 2 授業改善が進まない理由と授業改善の意義

#### (1) 「学校に求められている課題」と「日常的な業務」

以下は「学校に求められている課題」について「中央教育審議会 初等中等教育分科会 初等中等教育分科会（第80回）配付資料」（文部科学省,2012）および「高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 総則編 平成30年7月」（文部科学省,2018）から一部を抜粋し、キーワードとして羅列したものである。

グローバル化や情報化、少子高齢化、知識・技能の習得、思考力・判断力・表現力等の育成、学習意欲の向上、多様な人間関係を結んでいく力、言語活動、いじめ・不登校等への対応、特別支援教育の充実、ICTの活用、知識を活用、付加価値を生み出す、イノベーション、新たな社会の創造、国際的視野、個人や社会の多様性の尊重、他者との協働、課題解決、地域との連携、教育課程の評価・改善、カリキュラム・マネジメント、言語能力の確実な育成、理数教育の充実、伝統や文化に関する教育の充実、道徳教育の充実、外国語教育の充実、職業教育の充実

以下は学校における授業以外の「日常的な業務」について、その一部をキーワードとして羅列したものである。

授業準備（配布物印刷等）、登校指導、職員朝会、分掌打ち合わせ、出欠確認、提出物集め、集金、保護者連絡、教科会議、文書処理、出張手続き、行事等の計画立案、不登校生徒の対応、生徒からの相談への対応、特別な支援を要する生徒への対応、清掃指導、放課後個別指導、部活動指導、翌日への諸準備

上記の「学校に求められている課題」と「日常的な業務」が学校現場において「教員がやるべきこと」として一括りにされていると考えられる。

#### （2）一括りにされることに潜む問題点

教員一人の一日の時間は限られているため、必然的に優先順位をつけて業務に当たることとなる。例えば生徒からの相談内容が重要度の高いものであれば、そのことだけに集中することになり、その他の「日常的な業務」もままならず一日が終わることも少なくない。教員の日常は前述のような突発的なものが無い日であっても、生徒へのきめ細かな対応と授業でほぼ全ての時間が費やされる。よって、「日常的な業務」以外の新たな取組については、時々発生する隙間時間に割り当てられる。業務の優先順位を付ける際に、「学校に求められている課題」と「日常的な業務」が一括りにされていると、本来は二種類の業務をバランスよく進めなければならないと考えられるものが、「日常的な業務」に大きく偏るという問題が発生する。さらに、教員自身も偏っている事実気付かないこともある。

「学校に求められている課題」と「日常的な業務」の関係は、自動車会社に例えると「新型車開発業務」と「販売業務」に近い。現在販売している車の売れ行きが好調で販売業務が忙しいからといって、社会や市場ニーズをにらんだ新車開発がストップしては、その会社で販売する車は近い将来売れなくなることが予想される。学校が社会の変化に対応できない原因の一つが、この括り方にあると考える。

#### （3）授業改善の特性

「授業改善」は、その他の業務と一括りにして優先順位を下げてはならない業務であると考えられる。時代の変化に対応するため次々と「学校に求められている課題」の多くは、単発の業務として解決できるものは少なく、そのほとんどが授業を中心とした教育活動全体の取り組みで解決に向かうものと考えられる。パソコンに例えるならば、授業改善は基本ソフトであり、その他の課題はアプリであると見ることができる。学校に「不断の授業改善」という基本ソフトが存在して初めてアプリであるその他の課題が解決に向けて動き出す。ハードディスクの容量がいっぱいになったからといって、基本ソフトを削除してしまえばパソコン本来の機能を失うことになる。また、基本ソフトのアップデートを怠っていると最新のアプリが動かなくなることになる。

### 3 求められる「学校の姿」

#### （1）「授業改善」が見える学校

ここでの「授業改善」とは「学びに向かう力・人間性等の涵養」「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成」「生きて働く知識・技能の習得」を目的とした「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した試行錯誤であるとする。よって、「不断の授業改善が行われている学校の姿」とは日々試行錯誤する教員集団のことを指す。具体的には、知識および技能を習得する過程である授業の中に、生徒観に合わせた思考力・判断力・表現力を育む活動が取り入れられており、単元および学期または年間を通じた授業を展開することで、知識および技能だけでなく学びに向かう力や人間性等も育成される授業を作ろうと試行錯誤する教員集団のことと捉えることとする。このような集団では、「生徒に身に付けさせたい力をどう捉えるのか」「その力を身に付けるために必要な前段階の力は何か」「そのための本質的な問いはこれでよいのか」「今回の授業では教師の計画通りに生徒を導くことができたのか」等々、授業に関する様々な事柄について、日々考えを交流

する教員の姿が出現すると考えられる。よって、この姿が多く出現することをもって「授業改善」が行われている学校の姿と捉える。

(2) 教員の実態

平成 28 年に文部科学省が実施した「教員勤務実態調査」によると、教員が平日の勤務において「授業準備」に割いている時間は、小学校で 1 時間 17 分（平成 18 年比較で 7 分増）、中学校で 1 時間 26 分（平成 18 年比較で 15 分増）となっている（文部科学省, 2016）。青森県においては平成 27 年 2 月に青森県教育委員会によって設置された多忙化解消検討委員会から同年 12 月に「教職員の多忙化解消にかかる報告書」が提出されているが、この報告書によると、「日常多くの時間を割いている業務（複数回答）」として「授業準備」を挙げた教員は小学校（30.7%）、中学校（44.8%）、高等学校（51.8%）であり、小中学校では「学習指導」に次いで二番目に多く、高等学校においては最も多いという結果であった（青森県教育委員会, 2015）。このことから、高等学校においても小中学校と同等かそれ以上に教員は「授業準備」に時間を割いていることが分かる。

(3) 昨年度のインタビュー調査から

平成 30 年度、本校教職員（事務職員を含む）50 名程度にインタビューする機会を得た。インタビューの内容は「①この学校の生徒の良いところを教えてください」「②この学校の生徒の少し弱いと思うところを教えてください」「③授業において、教科で扱う知識・技能の他に身につけて欲しいと考える力を教えてください」であった。③については現在授業において実践しているいないに関わらず、生徒に対して身に付けて欲しいと願っている力でもよいこととした。そこでは次のようなことが発生した。ある教員へのインタビュー時、その内容に周囲の教員が聞き耳を立てていたり、インタビュアーとのやり取りに介入して発言するなどの行動が発生した。一対一のインタビューが結果として、複数人対一の話し合いとなり、その場は生徒の姿をキーワードに「ああでもない、こうでもない」といった話し合いの場となった。各自が個別の業務を忙しくこなしていた静かな職員室は、インタビューの間、活発な発言と笑顔に包まれていた。インタビュー終了後、「このように皆で授業のことについて話し合うことは楽しいですか」と質問したところ、全員が「楽しい」と回答した。また、「こういった時間は普段どのくらいありますか」という質問には、全員が「ほとんどない」と回答した。また、「ほとんどない」と回答した教員からは「この学校に来てから」等、この状況が本校限定であるような意見は出されなかった。このことから、多くの高等学校では、授業に関する様々な事柄について、日々考えを交流する教員の姿が多いとは言えないと推測できた。

(4) 「授業準備」の時間と「授業改善」の時間との関係

(2) および (3) から、高等学校においては「授業準備」にある程度以上の時間を割いてはいるが、「授業改善」につながる時間とはなっていない実態が考えられる。なぜなら、「授業改善」を進める上で必要となる授業に関する様々な事柄について、日々考えを交流する教員の姿が多いとは言えない現状がインタビューを通して見えてきたからである。

4 授業改善を進めるために必要な事項（視点）

これまでのことから、教科横断型授業改善に向けて具体的な取組を進める前提として、必要な事項を以下の 6 点にまとめた。

A 目的と目標の共有をはかる

「何を知っているか、何ができるか（個別の知識・技能）」に留まらないゴールや中間地点を設定するために必要であると考えられる。

B 話し合える時間を設定する

多忙な日常業務の中には担保されておらず捻出する必要があると考える。

### C 話し合える関係をつくる

話し合いを深めるためには心理的な安全が確保される必要があると考える。

### D 現状を見取りそれを共有する

現状の見取りを揃え、工夫改善のスタート地点とするために必要であると考え。

### E 様々なことをつなげる力をもつ

担当教科の知識・技能を社会の課題等につなげる力や、他教科の教員と「生徒に身に付けさせたい資質・能力」を共有する力のこと。新たな授業展開を開発するために必要であると考える。

### F 挑戦する勇気をもつ

前例の無い取り組みに対する気後れの無さや、使命感のこと。授業改善を実践し、試行錯誤を続けるために必要であると考え。

## 5 教科横断型授業改善に対する学年主任としての取組

(1) 今年度は前述の6つの視点をもとに、以下のアからカまでのことに取り組んだ。

表1 今年度の取り組みと視点の関係

	視点	取 り 組 み	目 的
ア	A F	学年経営計画の作成に関する会議の実施と提案	教科科目特有の知識・技能を習得する過程において身に付けさせたい力(資質・能力)を共有することで、授業改善の必要性を再確認し、授業改善に対する意欲を高める
イ	A E	ホームルーム活動の指導案作成に関する相談と提案(学年主任から副主任や担任への相談)	子どもたちが関わり合って学ぶ姿の実際を知る 現代社会の課題を共有する
ウ	B C E	夏期講習の授業内容を若手教員と学年主任が協働して考案 実際の授業では学年主任が補助として入る	若手教員が先輩教員と授業改善について対等に話し合えるようにする
エ	B C D	担当教科のT.I.を活用して多様性の理解を深める授業展開についての対話を実施	教科内において教科横断型授業改善に関連する考えの理解を得る
オ	C E	時事ニュースやコラムを題材にして、その内容と教科の内容をつなげる授業の展開例を他教科の担当へ提案し、連携可能かどうかについての対話を実施	教科横断の糸口を探る
カ	全て	異教科3人の週1回話し合いを実施	教科横断型授業改善として異教科3人で具体的に進める

(2) 各取組について

#### ア 学年経営計画の作成に関する会議の実施と提案

**実施状況** 年度初めに学校として設定している学年会議の時間に学年主任として基本案を提案し、学年教育目標(図1)を共有した。学年教育目標を「生徒と教師が共に学び共に探求する」とし、その手立て等をまとめ、説明した。

**成果** 2学期末に学年の担任7人を対象にアンケートを実施した。質問内容は「学年経営計画の内容は他教科と連携した授業づくりに対する考えに何かしら影響がありましたか」であり、回答を自由記述とした。回答は「影響はなかった」「見ていなかった」「何も考えていなかった」等であった。教科横断型授業改善だけでなく単独の授業改善に対しても効果を発揮していなかったことが分かった。

**省察** 学年目標は「基本的な生活習慣を身に付けさせる」「礼儀正しく服装頭髪等を整える」等、行動として見える部分を明文化したものが一般的であるが、今回は「何を目的に、こういった見方・考え方で選択したのかを考え、このことを伝えようとする人」というように、生徒の思考に焦点を当てた。これは、授業づくりや指導の際の拠り所として効果を発揮して欲しいと考えたことによる。特に各教科の授業改善の視点として役立ててもらえる

のではないかと考えていた。今回の結果を受けて、学年目標を前述のような目的で活用することが高等学校では一般的ではないこと、また、前述のような内容では授業改善に役立てにくいことが分かった。

イ ホームルーム活動の指導案作成に関する相談と提案

**実施状況** 学年裁量で実施可能なホームルーム活動の時間について、基本的には学年主任が副主任に相談しながら指導案(図2)を作成し、その内容を資料とともに提案した。学年全体に関わる内容については確実に実施してもらったが、クラス単独で実施可能な内容については指導案を担任へ配布はするが、実施するかどうかは担任裁量とした。

**成果** 2学期末に学年の担任7人を対象にアンケートを実施した。質問内容は「ホームルーム活動の内容は他教科と連携した授業づくりに対する考えに何かしら影響がありましたか」であり、回答を自由記述とした。回答は「内容によっては他のクラスと交流しなかった」「学年経営計画の探求に関する活動が多く新鮮さを感じた。ホームルーム活動の進め方を他の教科の先生に聞いたこともあった」「生徒に考えさせることを自分の授業でもするようになった。ただ、他の教科との連携までは考えていない」等であった。教科横断型授業改善にはほとんど効果を発揮していなかったが、単独の授業改善に対しては効果を発揮していることが分かった。

**省察** 学年経営計画が効果を発揮しなかったこととは対照的に、指導案の作成と提案は効果を発揮した。その理由として、一般的には担任裁量でテーマだけが渡され、内容は担任が作成しなければならないが、その部分を学年主任が引き受けることで、担任には業務が一つ少なくなるというメリットが発生する。また、学年主任には学年経営計画で伝えたいことを具体的な取組として渡すことができるというメリットが発生した。いわゆる win-win の関係が生まれたと考えられる。

ウ 夏期講習の授業内容を若手教員と学年主任が協働して考案

**実施状況** 夏期講習を計画する段階において、担当の若手教員と講習の目的を話し合い、目的を「数学に対する意欲を高める」こととした。若手教員から指導内容を提示してもらい、その内容を題材にして、参加生徒の意欲を高められるかどうかの視点で協議することを複数回実施した。

**成果** 夏期講習修了後は、協働した若手教員と、これまで以上に授業改善の内容や生徒の状況把握等に関して対話する機会が多くなった。授業改善に対しては気兼ねなく意見が出せ

2019 第1学年経営計画 20190405  
下山

○学校教育目標  
本校は、農業、商業、家庭並びに体育に関する学科を持ち、専門的な学習や実践的な活動を通して、人間性豊かで、社会に貢献できる人材の育成を目的とした男女共学の総合専門高等学校である。  
各学科において、それぞれの特色を十分に発揮しながら、生徒一人一人が自己に適した「一能一芸」を伸ばし、部活動や資格取得に励み、心身ともに健全で、生涯を通じて「生命(いのち)と価値(ねうち)」を探究する人間の育成を目指す。  
(※重点目標、具体的実践事項、生活目標は「学校経営方針」参照)

○学年教育目標  
**生徒と教師が共に学び共に探究する**  
※学校教育目標である『生涯を通じて「生命と価値」を探究する人間の育成を目指す』ことは、指導する側の教師自身もまた生涯を通じて探究する人間の一人であると捉え、生徒と教師が共に学び共に探究することで学校目標の達成を図る。

○学年の教育目標を達成するための手立て  
☆自己の思考を生徒と教師が共に探究するための視点

何を目的に	→どんな自分になりたいかの探究
→どの見方・考え方で	→各教科で学ぶ新たな見方・考え方の探究
→選択をするのか(したのか)	→実際に自分が行う(行った)言動等の探究
→このことを考える人	→自分とはどんなロジック(思考のみちすじ)で行動するのかの探究(メタ認知)
→このことを伝えようとする人	→他者と意見交換するための表現方法

※考える気力が出ない時や、失敗する時もあると思いますが・・・。

☆成長のみちすじ(感性を磨く)

- 自分を探究することで他者を知り(自分が感じているノイズに敏感になる)
- 他者を探究することで社会を知り(他者の感じているノイズを理解しようとする)
- 社会を探究することで自分を知る(社会にある事象の成り立ちを自分事として考えようとする)

※生徒が学んだ「知識」以上に「学び方」が次世代へ引き継がれる

○目指す集団像(生徒集団も、教員集団も)

- ・目的を共有し「素朴な疑問」と「つぶやき」を気軽に話し合う前向きな集団
- ・「情熱的な議論」も「ユーモアあふれる話題」も何でも受け入れられる集団
- ・様々な価値観を受け入れ尊重し、他者と関わることを好む集団
- ・多様な考えの人々がお互いに意見を主張し合いながらも、同じ目的のために粘り強く対話を重ね意見をまとめられる集団

図1 今年度の学年経営計画

る関係が築けたものと考えてる。

**省察**生徒の中で、数学で学ぶことと実生活が結びつき、学びに対する意欲が向上する授業展開を共に模索することで、授業改善の方向性を共有できている感覚を得ることができた。また、通常の授業ではないことが授業形態の工夫に自由度をもたらし、既成概念を取り払うことができた。今回の講習では外部の方に授業を参観してもらい、協議する場面もあったため、そのことが身内としての結束を高めることになった。

#### エ 担当教科の T.T. を活用して多様性の理解を深める授業展開についての対話を実施

1学年ホームルーム活動① (20190411)	
番号	名前
今の自分の状態を考え、その内容をもとにクラスメイトと交流しよう	
<b>〇この時間のながれ</b>	
①自分のこと考えて質問に答える (10分)	
②隣近所の人やどんなことを書いているのか見せてもらう (3分)	
③隣近所の人やの記述を参考に書き足しや修正をする (3分)	
④クラスメイトと交流する (20分) ※詳細は担任の指示で変更可	
挨拶→名前と出身中学校を告げる→用紙の内容を伝え合う→挨拶→次の人へ	
話したことのない人、出身中学の違う人、部活が違う人、性別が違う人を優先する	
⑤用紙の回収【担任へ】(4分)	
<b>質問</b> 以下について〇〇に入ることを考え記入してください (回答は複数でもよい)	
Q1. 学校に〇〇があれば毎朝前向きに学校に来られるような気がする	
Q2. 私にとっての前向きとは〇〇な状態のことである	
Q3. 私の前向きな状態に周りの人が気づくためのポイントは〇〇である	
Q4. とりあえず、4月は少なくとも毎日〇〇がクラスにあれば前向きになれそうだ	
Q5. 前向きになるために、まずはクラスの仲間に私の〇〇を知って欲しい	
今日交流した人を記入 (番号、名前)	
<input type="text"/>	<input type="text"/>

図2 ホームルーム活動の指導案 (一例)

**実施状況**同じクラスを担当している先輩教員と生徒の活動を観察しながら、授業クラス全体や個々の生徒の現状についてお互いの考えを出し合い、このことを題材にしながら、本校の現状や授業改善に対する考え等について対話した。対話の中で共有した授業改善に関する取り組みの具体的な内容については、その後の授業で取り組み、その有効性についても対話の中で協議した。

**成果**目指す生徒の姿について意見を出し合い、お互いの目的を理解し合うことでサイコロジカルセーフティー (心理的安全性) ※1が高まったと感じている。先輩教員からは、新しい考え方を学ぶことができたと声をかけてもらった。また、後輩のやる気を引き出す先輩の言動について筆者自身も学ぶべきことが多々あった。

**省察**生徒の現状を理解しようと情報交換する時間は重要であると考えてる。他教科との連携を進める際、お互いの授業の時に

観察した生徒の姿について情報交換して認識を共有することになるからである。同じクラスの同じ生徒を観察していたとしても、二人の情報を比較すると時間軸が異なっているという特徴を持つ。同じ授業を T.T. で担当した際は時間軸が同じであるため、全く同じ状況を観察できることが特徴となる。今回全く同じ状況を観察しながら対話を進めたところ、お互いの教育観を擦り合わせるための手法として効果的であるということが分かった。

#### オ 時事ニュースやコラムを題材にして、その内容と教科の内容をつなげる授業の展開例を他教科の担当へ提案し、連携可能かどうかについての対話を実施

**実施状況**担当する科目保健の飲酒と健康の授業において、時事的なニュースである「シブハロ問題 (渋谷のハロウィーンの問題)」に関するコラムを読ませ、飲酒と健康に関する科学的知識を基に意見を書かせる活動を実施した。この題材を他の教科の担当へ提示し、同じ題材を使って保健とは違う学びを作り出せないかどうかを聞く機会を持った。

**成果**理科担当教員からはアルコールが身体へどのような影響を与えるのかについて更に詳しく説明できるという意見が出た。また、国語担当教員からは説明文の作成方法について事前に指導できそうであるとの意見が出た。時事的なニュースやコラムを共通の題材と

し、このような形式でコラボすることに対しては可能であるとの意見であった。

**省察**複数教科による横断的な授業改善として必ずしも理想的な形とはいえないが、連携を深める初手として有効であると考ええる。

カ 異教科3人の週1回の話し合いを実施

本研究の中心的な取組として実施した。現在も試行錯誤の過程である。その経緯や経過について詳細に記す。

**実施状況**

(i) 前年度からの事前準備について

○前年度、事前に実施したインタビュー調査の結果から知り得たこと

- ・本校教員は生徒の成長について他の教員と話す時間を楽しんでいる。
- ・本校教員は授業で扱う知識および技能の他に「生徒に身に付けて欲しいと思っている力」を日常的に考えている。
- ・上記について、多くの本校教員が同じ方向を無意識に向いている。

○持続可能な取組とするため、教員が主体的に始める「授業改善」としたこと

「教育委員会から指導されて始まる」や「管理職から指示されて始まる」ではなく、「教員同士の話し合いから始まる」そして「管理職は同じ教員としての目線からフォローする」という流れが持続可能な取組につながるのではないかとの考えから「異教科3人の週1回連携」を中心に「教科横断型」の「授業改善」を実践することとした。(連携の時間は、3人に共通する教材を研究するための時間をベースとする。)

○教科と教科をつなぐ接点についての一考察

表2 教科をつなぐ接点を二つに分類したときの特徴

	①「知識・技能」を接点としたとき		②「資質・能力」を接点としたとき	
指導内容の共有	知識・技能の内容や構造が定まってお り、共有しやすい	易	その内容や構造が定まっておらず、共有し にくい	難
取組頻度	内容を共有できる特定の教科・特定の 時期だけのつながりとなる	少	全ての教科や特別活動、課外活動といつ もつなげることが可能	多
担当者間連携	取り扱う時期と内容の順序の調整が主 な内容であり、短時間で済む	浅	個々に感じてはいるが見える化できてい ない力を共有するためには、話し合いの時 間を多く必要とする	深

「教科横断」を考える時、①「知識・技能を接点としてつなげる」形がある。例えば「結婚」について、社会科で扱う「結婚できる年齢」と保健で扱う「妊娠・出産」をつなげる形などである。もう一つは②「資質・能力を接点としてつなげる形」である。例えば「自分の考えを言葉にして他者へ伝える」という力を育成するために、国語では「自分の考えを相手に伝える言葉」を学び、他の教科では「自分の考えを相手に伝えることで解決する課題」を設定するといった形などである。①と②のそれぞれの形には(表2)のような特徴がある。計画段階では②を選択することとしていた。

○話し合いを楽しく有効な時間とするために必要なこと

週に一時間3人で話す時間を「楽しい時間」且つ「授業改善」につながる時間とするには、話し合いの中でサイコロジカルセーフティー(心理的安全性)とインタレクチュアルセーフティー(知的安全性)<sup>\*2</sup>が担保されることが必要である。

○実施時期、実施内容等について、(図3)のような取組を計画

(ii) 今年度の取り組みについて

○異教科3人が連携することの難しさと対応策について

筆者の呼びかけに快く賛同してくださったA先生とB先生と筆者の3人で「異教科3

人」を形成することができた。しかし、連携の形態や頻度に関しては計画通りとはいかなかった。協力してくださった2人の先生方は多忙な業務の中、最大限に協力してくださるのだが、計画段階（昨年度）の予想以上に学校現場は多忙であった。本校は部活動が大変盛んな学校であるため、教員は放課後はほぼ100%部活動指導に従事することとなる。

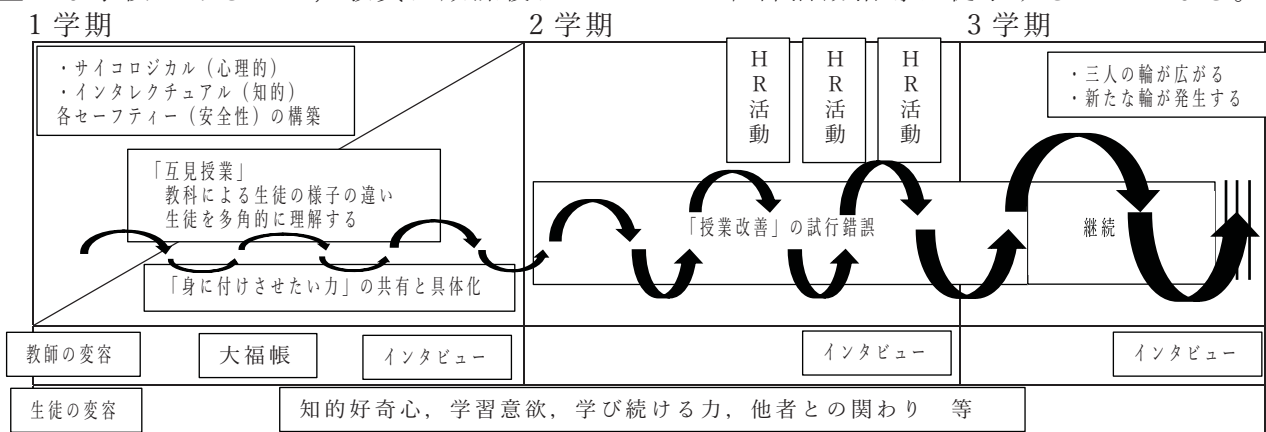


図3 昨年度作成した今年度の取り組み計画

また、時間割としては一日に1～3コマの空き時間があることになっているが、校務分掌の業務や授業の準備等をそれらの時間で処理しなければならないため、基本的には常時全て埋まっている。さらに、出張や病休の代替授業が急遽入ったり、授業変更が毎週のようにあるため、3人に共通の週に1コマを確保しようとしたが困難であった。そこで、3人が同じ時間に集まることを基本的には諦め、筆者とA先生の二人で話し合う時間と、筆者とB先生の二人で話し合う時間を捻出し、筆者がハブ役となってつなげることで3人の輪を形成することとした。また、A先生とB先生については、同じ部を指導しているため、両者の連携は筆者との連携以上に図ることができているようであった(図4)。

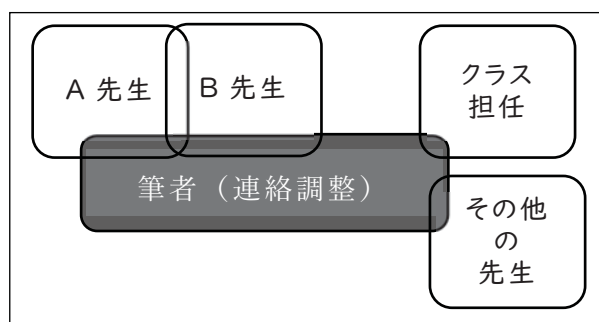


図4 最終的な連携の模式図

(2) 最終的に教科と教科をつなぐ接点は生徒の姿であった

前年度に計画していた教科と教科の接点を①「知識・技能を接点としてつなげる」ではなく②「資質・能力を接点としてつなげる形」を選択する計画であったが、結果として①でも②でもなく新たな接点として「共通で指導している一人の生徒の学ぶ意欲」を選択することとした。(表3)はそこに至った経緯である。

○その他

5の(1)にまとめたア～オについては、話し合いの題材として全て活用した。

**成果** 昨年度実施したインタビューでは、多様な考えを持ち、見方によっては一見バラバラに感じる教員集団の中に、共通する思いが潜んでいることを再認識し、その後の取り組みに対する意欲となった。実践した2人との話し合いは時間の経過を忘れるほど活発であったことから、他の教員と話すことを楽しいと感じるという部分は証明されたと考えている。話し合いでは、資質・能力に関する話題よりも特定の生徒の具体的な姿を取り上げる方が、活発な話し合いを生んだ。

**省察** 他の教員と話すことが楽しいと感じていても、日常業務の多忙を割いて定期的な話し合いを設けるというハードルは越えられなかった。1時間という枠や3人という枠にこだ



ならず、チャンスがあればいつでも語り合うスタンスが必要である。1月に3人で話す機会があり、今回の取組について自由に意見を出し合ったが、以前に比べて生徒のことを話し合う時間が圧倒的に少なく感じるという意見が2人の先生から共通して挙がった。

表3 生徒の学ぶ意欲を選択するに至った経緯

時期	実施内容	留意点	実施後の反省
年度当初	学年主任として学年目標を作成し、A先生を含む学年団へ提示した。	教科横断の形②を実現するために、育てたい資質・能力を共有することを心掛けた。文部科学省等から出された文言を直接使用せず自分の言葉でなるべくシンプルに作成した。	提示した学年目標と生徒の姿とを具体的につなげてイメージすることが難しい提示内容だった。
4月	A先生に日々の炉辺談話的な対話をお願いした。 ※4月から日常的に実施できている。	対話では実務的な内容と共に、教科横断型授業改善のイメージを少しずつ聞いてもらうこととした。	様々な業務でお忙しいのに、手を止めて対話に応じてもらい恐縮している。 ※サイコロジカルセーフティやインタレクチュアルが構築できたように感じている。
4月から6月	HR活動の指導案を作成し、各クラスで実施した。	筆者が考える育てたい資質・能力の断片を織り込むことで、担任の先生方に具体的にイメージしてもらおうと考えた。	50分一コマでは生徒に対する説明等もあり、活動させる時間が足りなかった。
9月	B先生との週1回連携①	学年目標と筆者の研究内容を説明し考えを共有しようと考えた。	サイコロジカルセーフティやインタレクチュアルセーフティを最初から構築することは難しい。
	B先生との週1回連携②	共通で担当しているクラスの生徒についてお互いの印象を出し合うこととした。	共通で指導している生徒の話題になると対話が弾むことに気づいた。
	共通して担当するクラスの生徒の中で気になる生徒の様子を出し合ったところ、大半の生徒については意見が一致したが、ある生徒について意見が全く違うということに気づいた。その生徒は本人曰く「部活動の疲れ」から授業中、隙さえあれば眠りに落ちるタイプであり、筆者とA先生の間では「眠り姫」として早くから話題に上っていた生徒である。そのことをB先生に話したところ、B先生の授業では一度も寝たことがないそうで、逆に他の生徒以上に意欲を持って取り組んでいると驚いていた。この事実からB先生の授業には筆者とA先生の授業にはない当該生徒にとって学ぶ意欲を喚起する何か潜んでいるということが推測できる。この生徒を中心に授業改善のきっかけを探ろうということとなった。		

## 6 まとめ

本研究では、高等学校における教科横断型授業改善について学年主任として取り組み、その過程において発生する課題や、発生した課題を解決しようとする中で見えてくる事実を考察することで、高等学校において授業改善が進まない原因の一端を探ろうと試みた。結果として、具体的な指導内容を開発し生徒の資質・能力を育む段階へは進むことができなかったが、その前段階である、他教科の教員とつながること、および、不定期ではあるが話し合いを進める段階までは到達できた。また、一つのゴールとして設定した授業に関する様々な事柄について、日々考えを交流する教員の姿については増やすことができたと考えている。さらに、今回の取組でつながった教科とは別の教科の教員とのつながりが発生し、今後共同で授業改善をする約束を取り付けられたことを、今回の取り組みの副産物として報告する。

以下は今回の取組で見えてきた事実とその考察である。

○目的や目標は文言と共に具体的な指導案を提示することで機能する

目的や目標（本研究では学年経営計画として提示した）はその性質上、抽象的な表現と

なる。その表現を読んだり聞いた際、文言としては理解できるため、その時点では納得する。しかし、納得していたはずの内容を、いざ、具体的な指導に落とし込もうとすると、案が浮かばないため実践できないということになる。本研究では、学年主任として、ホームルーム活動の指導案を、学年経営計画の内容に対応させて作成し、担任へ提示する手法をとった。担任へのアンケート結果から、学年経営計画の提示だけでは伝わらなかった内容が、ホームルーム活動の指導案を提示することで、それら2つの組み合わせの効果により、初めて伝わったということが分かった。

○連携には同じ側に立っている時間を増やすことが効果的（研修，T.T.）

若手教員との連携の際には、「外部からの参観者」対「若手教員と筆者」という関係が図らずも筆者と若手教員の連携を深めた。また、先輩教員とは同じ研修に参加した際、「講師」対「先輩教員と筆者」という関係が同様の効果を発揮し、教科指導のT.T.の際は「特定の生徒」対「先輩教員と筆者」という関係となり、同様の効果であった。

○他の教員に協力を依頼する時に生じる葛藤と授業改善を望んでも時間を割けない現実

昨年度実施したインタビューから「教員は生徒のことについて話し合うことを楽しいと思っている」という実態が見えており、このことを活用することで、週1回の話し合いは実現可能であると考えていた。具体的には、対話を1～2回程度実施することができればそこからは簡単に回数を増やせるものと考えていた。実際、話し合いに参加してくださった先生方の表情は生き生きとしており、時間が経過することも忘れて、話し合いが進められたこともあり、「楽しい」という部分に関しては想定通りと言える。しかし、このことが話し合いの回数を増やすことにはつながらなかった。例えば、定期考査の作題時期や採点時期、授業変更によって授業時数が増えている週など、お願いしたい教員の状況が理解できるだけに、お願いすることを躊躇してしまった。他の教員に協力してもらうことは「大切な自分の時間を私に提供して欲しい」とお願いすることと同義である。この取組に協力して下さっている先生方は、普段であれば他の教育活動に費やすであろう時間を筆者に提供してくれたのである。生徒のために、たとえ多少の痛みを伴ってでも、新たなことに取り組もうと考えている教員であることは間違いない。そうであるにも関わらず、週に1回の話し合いの設定が苦しくなる現状について、時間を生み出すためのアイデア（工夫）を検討する必要性があると考えている。

※1 (psychological safety) 他者の反応に怯えたり恥ずかしさを感じたりすることなく、自然体の自分を出すことのできる環境や雰囲気のこと。

※2 (intellectual safety) 分からなくてもいい、何を質問してもいいという環境や雰囲気のこと。分からないことを増やし、思考を深めたり広げたりするために必要である。

## 引用・参考文献

青森県教育委員会(2015)「教職員の多忙化解消にかかる報告書」多忙化解消検討委員会

文部科学省(2012)中央教育審議会初等中等教育分科会 初等中等教育分科会(第80回) 配付資料

「資料5-4 教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について(審議の最終まとめ(案))」<https://www.mext.go.jp>

文部科学省(2015)中央教育審議会初等中等教育分科会 初等中等教育分科会(第100回) 配付資料

「資料1 教育課程企画特別部会 論点整理」<https://www.mext.go.jp>

文部科学省(2016)「教員勤務実態調査」<https://www.mext.go.jp>

文部科学省(2018)「次期学習指導要領に向けた審議の流れ」<https://www.mext.go.jp>

文部科学省(2018)「高等学校学習指導要領解説 総則編 平成30年7月」<https://www.mext.go.jp>